

院内だより

317号
岩本内科
29・7



土讃線に遊ぶ

大歩危峡まんなか
[大歩危峡停留所下車]

最近JR西日本の豪華寝台列車(瑞風)で走るホテルが近畿中国地方を周遊するという報道があった。これを見習うようにJR四国でも4月から“四国まんなか千年ものがたり”と呼ばれる観光列車を運行する企画が報じられた。これは多度津駅から土讃線の大歩危駅までの約66kmを往復するもので、地元のイベントでもあり、この企画を実体験したく前売り券を買って6月の中頃に多度津駅から乗車してみた。

観光列車の外観は赤、青、緑の三色三両編成で、内部には二人席、四人席などの座席が用意され、窓枠は横長で大きく見晴らしの利く作りであり、家族や友人たちのグループがテーブルを囲み楽しそうであった。車内放送でいろいろ説明があったが、乗客の雑談、車両の雑音、さまざまな音の反響などで難聴の私には聞き取り難かった。その際“千年ものがたり、しあわせの郷紀行、お散歩MAP”といったパンフレットを配布してくれたのでそれを参照しながら話を進めたい。

車内では途中から昼食弁当が配られ、車窓からの風景を眺めながら食欲を満たした。途中の琴平や阿波池田駅では歓迎ムードが賑やかで、ホームでは土産物の販売もあって乗客は賑やかな一時を過ごしたようである。ところで古く蒸気機関車が走っていた時代の土讃線は多くのトンネルが続き、煤煙に悩まされるため外の風景を楽しむことのできない難行苦行の旅であった。しかし、現在ではディーゼル車両に変わり煤煙の心配も無く、スピードも速く快適で四国有数の長さを誇る猪鼻トンネルも楽々と越して徳島県に入り、スイッチバック構造の坪尻駅を見学し、金刀比羅宮の奥之院で知られる箸蔵駅を過ぎるとやがて吉野川の長い鉄橋を渡り、川の南側に広がる阿波池田に着いた。

この阿波池田地区は幕末から明治にかけて阿波刻み煙草の生産が盛んであって、財を成した商家には美しい装飾瓦のウダツが当時の面影を残している。阿波池田駅を出発した列車は川上に向かって南に進み三縄の第一吉野川橋梁を渡り、祖谷口を越して更に進むと小歩危から大歩危へと進んでいく。この辺りの溪谷は吉野川一番の景勝地で今回の観光企画のメイン的存在となっている。

小歩危に入っていくと溪谷の兩岸には樹木が茂る高い山肌がせまり、溪谷は美しくしかも荒々しい感じの奇岩が延々とした姿を見せてくれる。この辺りは水の流れも速くなり若者たちの好むラフティングと呼ばれる川遊びに興じているグループの姿が眺められ、車窓から手を振るとパドルを振って応えてくれる姿が嬉しい。そのため列車もゆっくりと人が走る位にスピードを落してその景色を楽しませてくれた。

更に、小歩危から大歩危に入っていくと地球規模の古代に、地中深くマグマの圧力を

受けた地層が隆起し、急峻な地形を作り出した姿を見せている。この現象は日本列島の成りたち分かる学術上の価値が高い場所であることから、国指定の名所天然記念物に指定されている。また、川岸を川下から川上に見ていくと、地層の傾斜の向きが場所によって異なるのを観察でき、地球のダイナミックな営みが感じられるという。これは一億年から二億年の歳月をかけて形成されたV字峡には特有の何層にも重なった地層があり、ごつごつした岩肌から地球の息吹が感じられ、その厳しい成り立ちからは想像できないほど吉野川の水は美しい紺碧(エメラルドグリーン)に輝いているという。また、大歩危、小歩危の名の由来は、古語で崖や険しい道のことを「ほけ」や「はけ」と言われたのが訛って「ぼけ、歩危」になったというのが有力な説とされている。

このような大昔の姿を現しているという景勝地を楽しむ人々は多く、近年は土讃線走る全ての特急列車が停車する大歩危駅となり、年間約3万人の観光客が訪れるという。土讃線の駅から徳島県三好市の祖谷方面に車で足を伸ばしてみると、見どころが沢山あって、例えば平家屋敷民族資料館、祖谷のかずら橋(国指定重要文化財)、祖谷温泉、祖谷溪小便小僧、琵琶の瀧、落合集落などがよく知られている。これらの山深くに入っていくと、険しい山にしがみつくように広がる特徴的な山間集落が長い歴史の中で作られている姿を見ることができる。

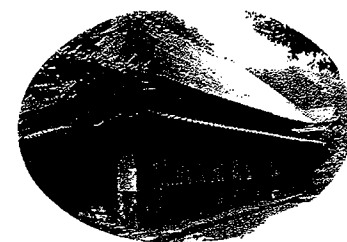
昔、治山治水が発達する以前には安全な山の尾根が街道として栄えたが、その後は文明開化によって尾根から次第に下って住むようになり集落が広がっていった。このような高いところをソラと呼び、ソラからは千年も変わらぬ風景が広がっていった。ソラの郷と呼ばれる集落風景が今も色濃く残り、秘境祖谷・陸の孤島が楽しめるといわれて、心の原風景を探す旅になると思われる。また、古くから阿讃山脈を越え吉野川に沿って走る土讃線にはトンネルや橋梁が数多くあり、多度津から大歩危までの区間にトンネル36か所、橋梁146か所もあると聞いて驚いた。

話は変わり、今年も早明浦ダム水位が気になる季節となり、水不足を心配するのは香川の国民性かも知れない。四国で一番大きい吉野川の源流は瓶が森で四国の中央を東西に流れ、紀伊水道に注ぐ総延長194kmの大河であり、流域は四国四県に及ぶ。讃岐は昔から水不足に悩まされた苦い経験をもち続けていた。この慢性的な水不足を解消するために建設されたのが、早明浦ダムによって蓄えられた吉野川の水を、徳島県の池田ダムを通じて香川県に導入するという香川用水の難工事であった。香川用水の水源は早明浦ダムだといわれ気になるはずである。

ラフティングのグループ



平家屋敷民族資料館



ソラに見る祖谷の集落風景

